



プレゼンテーション

「あの空は泣いているのだと思います。ただの晴天ではなく、スコーンと果てなく天に突き抜けた、真っ青さとスケール感、ただ見ていて吸い込まれてしまう、底なしの虚しさ、カタルシス後の解放感を照明で表現したいのです」。数年前にお世話になった、照明家のグレゴリー・クヌブルさんの『Blue』というプロダクションでの表現は印象的でした。これは、照明家だけの腕では達成できません。役者の表情、セリフはもちろん、セットの素材とスケール、プラス、音響でさらに空間に奥行きと勢いをつける。

舞台照明家にとって、プロダクションのクリエイティブチームに、「事前に『このような感じの照明を作ろうと思います』という言葉表現はあっても、ビジュアルにプレゼンテーションをすることは、あまり見たことがありません。言葉で表現することが上手な人は、うまい比喻や、例えば、照明の雰囲気や効果を伝えることができます。

しかし、照明家がいくらうまいことを口で言っても、実現できなければ意味はありません。自分は、照明デザインのお仕事以外にも、アシスタント照明デザイナーや、プログラマーとして働かせていただける機会があるときは、積極的に引き受けさせていたくようにしています。他の照明家さんと演出家、舞台美術家とのやりとりを見ているだけで、とても勉強になりますし、プロセスの違いを見比べるのも、大変興味深いものです。

3Dのビジュアルライズドプレゼンテーションは、舞台照明界ではあまり見ない

ものの、コーポレートのイベントや展示会、ファッションショーなどでは、よく目にします。商品やブランドを世界中に公表する一瞬のイベントでも、高額資金を出してそれをためすクライアント/スポンサーからの信頼と期待を、事前に得るためなのかもしれません。

舞台照明家が、このような3Dのビジュアルライズドプレゼンテーションをしない理由は？「どうせ現場で変わるし、3Dで表現しても、実際の見栄えはかなり違うので、あまり意味がない」「そんな時間があるのだったら、もっと深く台本を読み込んだほうがいいね」「セットが特殊な形だったり、打つアングルが難しい時は、3Dでやるときもあるけど…」「ロックコンサートなどは、事前打ち込みが必要なので、ライトコンパースが重宝しています」など、いろいろな声を耳にしますが、基本演劇の舞台では3Dを使わない人が大多数です。

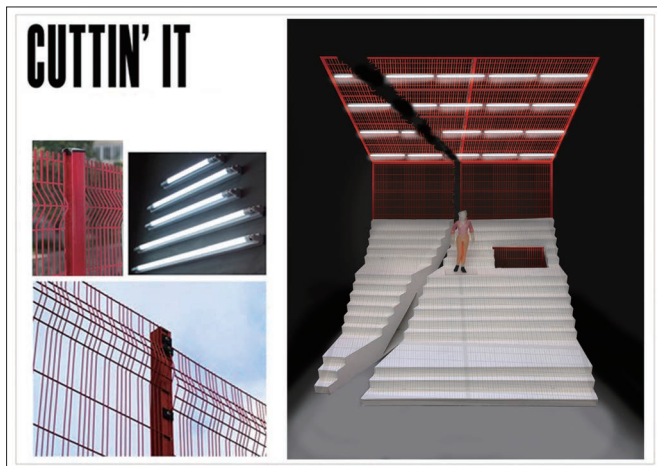
演劇舞台の舞台美術家のプレゼンは、毎回見るたびに感心させられます。イギリスでは、モデルボックスの発表会をホワイトカードと呼んでいます。そこで舞台美術家は、リサーチ資料、スケッチ、ドローイング、インスピレーションを受けた写真や、画像を見せながら、彼らのデザインをプレゼンテーションします。プレゼン馴れしている彼らは、リズム良く淡々とコンセプトやセットの仕組みを説明していきます。照明効果を詳しく知っていらっしゃる舞台美術家でしたら、話は早いですが、そうでない舞台美術家の方もいらっしゃいます。舞台美術家の好む素材の見せ方、影の出し方、色味など、彼らのアイデアが硬く決まっている時は、「こういう照明をくださいますか?」と、ホワイトカードの時点で、ダイレクトに照明家に見せてくる/伝えてくる方も少なくはありません。そういうアイデアを、嫌がって聞く照明家はあまりいませんが、あまりにも注文が多いと、

「では、照明デザインもお任せします!」と半分冗談交りで言う照明家もいらっしゃいます。

ホワイトカードで、照明家はプロダクションがどのような方向/スタイル(自然光的、抽象的、スタイライズ等)で進んでいくかの、大体的見当がつけられる初めの一步になります。経験豊かな照明家の方々は、いろいろなセットの素材の種類、特徴、傾向の知識があるので、その場で提案もできるし、問題点も指摘できます。時間と予算が許せば、事前にセットのサンプルを使って、照明の見え方の実験をすることも多々あります。舞台美術家のプレゼンはホワイトカードで数回できますが、照明家のプレゼンは現場でぶっつけ本番(明かり作り)なので、自分でも初めて見るという心配と期待は十分あるかと思えます。

余談ですが、過去によく、イングリッシュナショナルオペラでセットデザインをされていた、知り合いのRさんのお話です。セットが舞台上で組み上がった後で、照明家と照明の色実験の時間を設けたそうです。何十枚というゼラをオーダーして実験しても、Rさんがじっくりの色が出せなかったそうです。その後も、Rさんは何度も劇場に足を運び、照明への抗議を続けた末、明かり作りの時間を妨害したという理由で、結局Rさんは、ドレスリハーサルまで劇場への立ち入りを禁止にされたそうです。なんとも言い難い状況ですね。演出家がどこまで、このプロセスに関わっていたのかはわかりませんが、舞台美術家と照明家の信頼関係が崩れる瞬間とは、大地震で巨大ビルが崩れるような、絶望的瞬間なのではないでしょうか。想像を絶します。信頼関係は、妥協があるにせよ、幕が開くまで保つことは、私たち舞台人の最低限の責任のようにも思えます。

素晴らしい照明家の作品を見るたびに、照明家に求められる能力の中で、一番重要なのは、脚本の読解力だということを知らされます。照明のプレゼンはあって、ないようなもの。最終的に説得力があるのは、そういう読解力から来る鋭い視線であって、それが現場で実現できる人たちは信頼があるので、事前のプレゼンテーションは求められないようです。



5月からの公演“Cuttin' It”プロダクションのホワイトカード